



特集

対話「表わすことと受け取ること」

気持ちの伝え方とは、実に様々であるということである。「自分なりの表現」は、自分の意図を相手に確実に受け取ってもらえるという保証があるものではない。

対話「表わすことと受け取ること」

気持ちの伝え方とは、実に様々であるということである。「自分なりの表現」は、自分の意図を相手に確実に受け取ってもらえるという保証があるものではない。

全盲で重度の知的障害を併せもつ彼女は歌が好きで、自らも度々口ずさむのであるが、その日も廊下を歩きながら、ジブリの歌を歌っていた。前方から彼女に向かって歩いていた私は、その歌声が彼女に近づく度徐々にはっきり聞こえていた。しかし彼女は歌詞が分からなくなったのか、途中で歌が止まった。私は何か気を利かせようと考え、続きを歌うと、彼女ははっとした様子で立ち止まって聴いていた。歌が終わると音源である私に近付いて来て、いきなり首を絞めてきた。全盲の生徒。音に敏感だ。少しの音源さえあれば位置を特定できる。彼女も例外無く、私の首を狙い撃ちしてきたのだ。そして、中学3年生の彼女は身長が高く、体格もよかったためか力も強く、息ができなくなった私は必死で逃れた。少し離れた所から「音程が少し違ったかな？ごめんね」と言って別れた。音に敏感な彼女である。私は自分が気づかない部分で、オリジナル曲の音程と違った音を出してしまい、その怒りを買ったのだと思っていた。後で、彼女の担任に事の次

第を話すと「それは『もっと歌って欲しい』という意思表示だったと思います」と言われた。「え！音を外して怒っていたのじゃなくて、もっと歌って欲しかったの？」『首を絞める』ことは対象への攻撃的な感情表現とばかり思っていたため、とても驚愕した。

行為そのものとその前提の心の動きは、必ずしも有意義なものであるわけではない。おそらく重度の知的障害をもつ彼女には『首を絞める』＝『歌えない』という私たちの思い込みを越えたところで、気持ちを伝えたい一心で、手を伸ばした先にあった私の首（音の出所付近）を両手で思い切り掴んだのだろう。それを私は「絞めた」という語で目の前のリアルを切り取ったにすぎなかったのだ。

気持ちの伝え方とは、実に様々であるということである。「自分なりの表現」は、自分の意図を相手に確実に受け取ってもらえるという保証があるものではない。





私は彼女の要望に応えられなかったことを残念に思った。彼女は自分の気持ちを表現したにもかかわらず、歌をもっと聴くことは叶わなかった。落胆したに違いないのだ。

では、表現を受け取る側としてはどうなのだろう。「一般的」には、首を絞めるという行為は、相手に不快感や生命の危機を感じさせる行為である。ただ、今回の場合がそうであるように、そのような一般的な受け止め方が、情報を発信する側の意図を反映しているとは限らないところにコミュニケーションの難しさがある。

どう判断したらいいのだろうか。あの時の彼女を思い出す。真顔で一直線にこちらに向かって来て、首を絞めながら小さな声で歌を歌っていた。日頃の彼女の行動、趣味趣向、生き立ち、人間関係などを知り、長く時間を共にした家族や担任ならば、彼女の様々な側面から真意を掴む可能性は格段に上がるはずである。

そして、「見えない」と「見える」では根本的に世界の捉え方や認識の仕組みが違う。そのことを理解した上での彼女のプロトコルのコンバートが必要であったのだ。

美術作品を鑑賞する時に、作者を想う。作者の生きた時代、

両親、兄弟、生活環境、経済状況、生き立ち、好きだった人、友人、芸術以外にやっていた仕事や趣味、思想、性格、幸福度、見た目、死因など、一つの作品に至るあらゆるバックボーンを探ることで見えてくる面白さがある。

もちろん『受け取る側の自由』があるので、裏に潜む真実など関係なく、芸術という表現を楽しめばいいのである。ただ、作品の噛み締め方の方法として、これは一つの提案である。芸術作品という表現を勝手に受け取るのか、あるいは、時を超えて作者とのコミュニケーションを図ることにチャレンジするのか。味変のように最初は「何も情報が無い状態」で味わい、次に「よく調べてから」再度鑑賞するのもよし、そして若い頃に見た作品を年を経てもう一度鑑賞することは更に面白い、あの時の自分と何か違う感情が湧いてきたら、それは作者とのコミュニケーションだけではなく、過去の自分とのコミュニケーションも楽しめるということなのだ。

IDDN

Contents

2-3

特集

対話「表わすことと受け取ること」

気持ちの伝え方とは、実に様々であるということである。「自分なりの表現」は、自分の意図を相手に確実に受け取ってもらえるという保証があるものではない。

Welcome to Information Design Department!!

北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」をお読みいただきありがとうございます。

本校情報デザイン科では、全国から学生を募集しております。寄宿舎があり、道内外に関わらず入舎可能です。土日祝日も開舎しておりますので、遠方からの入舎も安心です。ご興味のある方は是非本校にご連絡ください。詳しくは、本校 web サイトにて情報デザイン科のページを御覧ください。

専攻科情報デザイン科の特徴

- ・高等学校に設置される「専攻科」と同様の枠組みです。(いわゆる「準ずる教育」の教育課程です)
- ・授業料が全くかからず、材料費等も非常に低コスト^(注1)で、対費用効果の高い学びができます。また、通学等に関わる費用は「就学奨励費」の対象^(注2)となっており、支援制度等も充実しています。
- ・DTP や Web に係わる「最新の」「スタンダード」な内容を重視します。(例えば、Web であれば、HTML5 と CSS3 を使い、セマンティックなコーディング、というように。もちろんテーブルレイアウトや center タグは使いません！)
- ・デザイン等に専門的な学習だけではなく、特別支援学校における「自立活動」^(注3)で扱うべき内容、例えば日本語教育や聴者社会の社会生活に係わる内容等を、総合的に、到達度がはっきり理解できるように学びます。
- ・学生のこれまでの学びの環境や積み重ね(「普通校」出身者か「聾学校」出身者か、失聴時期、日本語のリテラシー、学力等)に合わせた教育方法を準備します。
- ・筑波技術大学と協調した授業等も行っています。



- ・修了後について、本人、保護者の希望をお聞きすると同時に、ロールモデルとなる聴覚障がい教職員のアドバイスを受けたり、聴者社会とろう者社会、ろう者と難聴者との違い^(注4)などについて客観的に学びながら、単に「好きなこと」から「(社会にとって、自分にとって)やる価値のあること」「自分の技量でできること」「社会に貢献できること」といった観点から主体的に進路選択できるようにしていきます。

注1：現在、学校で材料費等は徴収していません。授業毎に使用する材料等は、すべて学生自身で準備し、学校に持参していただきます。注2：特別支援学校に在籍する生徒・学生への補助制度で、帰省や通学にかかる交通費、給食費等が対象となり、所得状況に応じて額は変わります。注3：普通校には通常ない領域で、障がいそのものの改善に焦点を当てます。具体的には、弊校の場合、聞こえや社会生活、コミュニケーションに係わる内容となり、学校の教育活動全般をとおして行われます。注4：医療や教育分野では聴力を基準に考えることが多いですが、聴覚障がい者の実際の社会での有り様においては、日本語を母語とする「ろう者」と聞こえづらくとも日本語を母語とする「難聴者・中途失聴者」で分かれます。

ファックス：0134-62-2663

電子メール：koutourou-z0@hokkaido-c.ed.jp

電話：0134-62-2624

※入試前まで教育相談等に対応できます。

一人一人に合った指導方法を準備するために、できるだけ入試前に教育相談にお越しになることをおすすめいたします。

情報デザイン科学科だより

Information Design Department

IDDNewsletter

September 2023 9

IDDNewsletter

September 2023

発行人／北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」編集チーム

発行／北海道高等聾学校

〒041-0261 北海道小樽市銭函1丁目5-1

www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp

※ご意見、ご要望などにつきましては、上記 Web ページより電子メールでご連絡ください。